

Book Review 18-1 警察小説 リバー/罪の轍

『リバー』（奥田英朗著）を読んでみた。

群馬県の河原で若い女性の全裸殺人事件が発生。10年前の未解決殺人事件を彷彿させる。その後、足利でも同様のうつ伏せで絞殺された死体を発見。両名ともマッチングアプリを使って援助交際していた。

この渡良瀬川流域は、物量コスト削減のために高速インター付近に巨大な商業圏が出現し、地域住民以外が大量に行き来し、流動性と匿名性が高まっている。

被疑者は三人。県議の閉じこもりの息子。夜な夜な車で出かける。後に解離性障害と判明。覚せい剤中毒で人格が崩壊している男。10年前にこの地に居て舞い戻った大柄なトラック運転手。

警察官以外に、前回被害者の父親（写真店経営）が登場。殺害現場を訪れる人間を10年間撮り続けていた。3年前に定年退職した元刑事が覚せい剤中毒の男を犯人と断定して追いつける。

犯人は誰なのか。650ページもあるので、最後は結論を急いだのかな、という気がしないでもない。

『リバー』を読んだのは、前作の警察小説『罪の轍（わだち）』に圧倒されたからである。吉展ちゃん誘拐事件を彷彿させる東京オリンピックを翌年に控えた1963年に身代金の金額も同じ50万円という誘拐事件が発生する。日本が急速に都会化する一方で、地方には貧困が溢れ、濃厚な人間関係が残っていて、町の片隅では子供が屯している時代だった。時代に取り残されて貧しく、悲惨な成育歴を抱える人物が、ちょっとした歯車が狂って取り返しのつかない事件が起こってしまう。事件を解決するために警察が奔走する中でそんなことが浮き彫りになってくる。

一冊読むなら『罪の轍』を推薦する。